

医学部ウォーカー

1面：医学研究科長・医学部長寄稿／附属病院院長寄稿 2面：
教授就任挨拶「附属病院院長」／ベネシオセンター「小川
州大学医学部耳鼻咽喉科学教室」／退職にあたっての挨拶
3面：耳鼻咽喉科教育「育成功労賞2020を受賞して」小川
先生、学会賞受賞「JIR Excellent Reviewer Award in 2020」
を受賞して 4面：「17th Korea-Japan Joint Symposium on
Helicobacter Research Young Investigator Award」を受賞し
て「日本消化器学会 味の素賞」を受賞して「日本消化器
病学会第210回東北支部例会 特別企画Ⅱ 目指せ！消化器
専門医～後期研修医からの報告で優秀演題賞を受賞して」
5面：日本消化器内視鏡学会東北支部例会「めざせ！消化
器内視鏡専門医」優秀演題賞を受賞して「弘前医学会総会
優秀発表賞を受賞して」6面：優秀論文賞を受賞して
「論文賞」を受賞して「医学科教育FD／成績優秀生表彰」
7面：「科研費補助金採択状況／成績優秀生表彰」8面：
青森県知事と新入生・二年次学生との懇話会／学生だより
「弘前大学」入学して「BSLについて」9面：学生だより
「クラクラ」を終えて「写真コラム」10面：大学院生だより
「聖火ランナーを務めて」11面：全日本選手権に進出へ
「学生教員・医師だより」12面：研究室紹介「糖鎖工学講座」
「救急・災害医学講座」13面：部活動紹介「拳闘式部」
陸上競技部、国際医療研究会 14面：青森あずま温泉紀
行／人事異動

題字 元弘前大学長 遠藤正彦氏筆

医学研究科長
医学部長寄稿

科研費採択と研究者の真の快樂

医学研究科長 廣田 和美



五月二十一日(金)に研究・イノベーション推進機構が、「若手研究」と「基盤研究C」へ応募予定者対象に科研費の採択されるコツを教えますと題して「科研費獲得やる気ゼミ」を開催しました。研究・イノベーション推進機構のHP上の科研費獲得スキル向上セミナーのページ(<https://www.innovation.hirosaki-u.ac.jp/kakenseminar>)でセミナーの動画を見ることが可能です。ゼミの第1章では、「申請書の書き方」について概論的でありながら、コツとなる部分を細かく説明をしてくれています。第2章の「見栄えをよくするポイント」では、審査員の立場から見るとどのような計画調書を審査員が好むか、よく見えるかについてかなり細かく説明しています。第3章の「審査員はココを見ている」では、計画調書の評価の仕方、審査の流れについて説明しています。第4章では「図表の

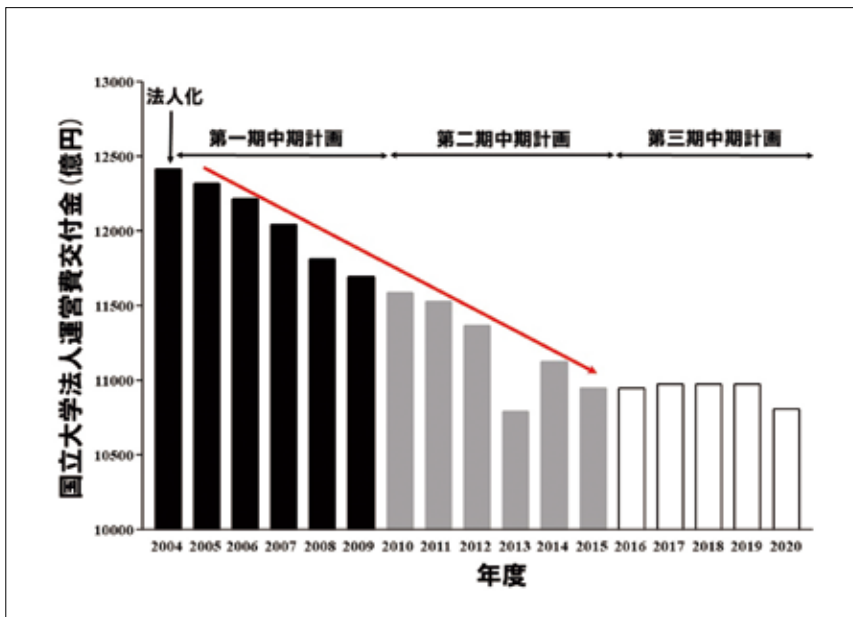


図. 国立大学法人運営費交付金の推移

書き方」についてわかりやすく説明しています。非常に懇切丁寧な説明がなされていますので、是非参考にしたいと思っています。総論的にはこれ以上ない内容だと思います。その後の六月十六日(水)に医学研究科として「科研費採択率向上FD」を開催しました。研究分野毎にやはり特徴がありますので、各論的な意味合いで医学研究科としてもFDを実施した次第です。また、同じ医学研究領域であっても、基礎医学領域と臨床医学領域では、審査員の考え方や採択されやすい研究課題の方向性が異なりますので、2部構成でFDを行いました。第1部基礎医学領域では、ゲノム生化学講座・藤井穂高教授、病理生命科学講座・鬼島宏教授、分子生体防御学講座・伊東健教授に講演頂き、第2部臨床医学領域では、附属病院長の泌尿器科学講座・大山路教授と私で行いました。こちらも、医学研究科HPに公開(学内限定)されています(<https://www.med.hirosaki-u.ac.jp/etc/local/syokuin/archive2021.pdf>)。是非とも、研究・イノベーション推進機構のセミナー並びに医学研究科のFDを参考にして頂き、今年度の科研費取得を目指して頂きたいと思っています。科研費取得を何故大学が強く求めるかと言えば、理由の一つにはやはり運営費交付金の減少があげられます(図)。図に示しました様

に、国立大学法人化に伴い年々低下し国全体で千五百億円程度減額されました。ですので、減額分は科研費などの外部資金で補う必要があるわけです。講座運営に関しても同様で、運営費交付金が減っただけでなく、デフォルト事件以降製薬業界からの奨学寄附金はほぼゼロとなり、競争的に製薬業界の研究費も取得する必要が出ています。このため、各講座の運営をする上でも科研費は非常に重要な外部資金になっています。ただし、財政基盤安定のために科研費を取得すると考えると、多くの研究者は、科研費の取得に前向きになれないのではと思います。福沢諭吉が書いた「福翁自伝」には、研究者の求める真の快樂とは何かが書かれています。貧乏をしても、難澁をしても、粗衣粗食、一見見る影もない貧乏生でありながら、智力思想の活発高尚なることは、王侯貴人も眼下に見下すという気位で、ただ六かしければ面白い、苦中有楽、苦即楽という境遇であったと思われる。つまり、研究者にとって、真理の追求こそが、快樂であり、自尊心を満足させるものということです。決して金銭欲、出世欲のためではないわけです。私もそのように思います。新しい発見をした時のワクワク感、達成感、そしてその感覚をまた味わいたいと言う思いで研究をしていると思います。そして、それが患者さんの治療、診断、QOL向上に役立つものであればなおさらです。この精神は、忘れてはならないと思っています。そして、その精神で研究をしていれば必ずと科研費も付いてくると思

附属病院院長として二年目の夏を迎えましたが、昨年と同様に新型コロナウイルス感染症への対応が附属病院の大きな課題のひとつになっております。この未曾有の感染症への対策としては、PCRによる迅速な診断、迅速なトリージング、隔離・ゾーニングという一連の対応、そしてワクチンが重要です。昨年から院内のPCR検査体制の強化を行ってきましたので、本院のPCRのキャパシティはかなり向上しております。また、感染制御センターと高度救命救急センターのご尽力で他施設との緊密な連携が実現し、大規模クラスターにも対応できる医療圏全体の体制が整っております。ワクチン接種に関しまして、医療従事者、職域、自治体の大規模接種、そして大学コンソーシアムの接種と、基礎系の先生方



附属病院の近況

附属病院長 大山 力



のご協力も頂きながら、順調に接種が進行中です。この場をお借りして、皆様のご協力に感謝申し上げます。さて、この原稿を執筆中の八月初旬はオリンピックの真っただ中で、日本選手団の活躍が連日報道されております。前回、一九六四年(昭和三十九年)の東京オリンピックでは、聖火ランナーを日の丸を振りながら見送った記憶のある私は、女子バレーボールの東洋の魔女、マラソンのアベベ選手や円谷選手、体操のチャスラフスカ選手、柔道の神永対アンソン・ヘーシ

ンクなどの名場面、名勝負を凌駕するシーンを期待しながら仕事をしております。しかしながら、オリンピックの盛況と同時に新型コロナウイルス感染症もまた、第五波を迎えております。相手は千変万化する変異株ですから、なかなかの強敵です。こちらも臨機応変にスピード感のある適切な対応が取れるように身構えております。プレハブのトリージング棟に加えて、パンドミックや大規模災害時のトリージングスペースとなる多目的棟も今秋に竣工予

(次ページへ続く)

（前ページより）
定です。新型コロナウイルス感染症を制御しながら、附属病院の機能を十分に發揮できるように万全を期して参ります。

一方、コロナ禍への対応の中で加速した新しい試みもあります。その一つが遠隔診療です。本院とむつ病院とを高速通信システムで連結して、手術支援ロボットの遠隔操作の実証研究が、傍田副病院長をリーダーとして進行しています。また、本院の電子カルテを外部から閲覧できるシステム

や血液透析の遠隔診療支援はすでに稼働し、放射線診断医の在宅画像診断や「eICU」等も実施の方向で準備が進んでいます。医療情報部の佐々木教授に

めて、オンライン診療を本院の重要課題として推進して参ります。

また、新病棟の建設も計画通りに進んでおり、二〇二二年度末には一期病棟が完成します。その後、現在の第一病棟が新築の一期病棟に移動し、臨床研究棟が現在の第一病棟に移ります。そして、現在の臨床研究棟の跡地に二期病棟が建築予定です。天に向かって伸びる新病棟を見ながらの診療は、自然に勇気と力が湧いてきます。

教授就任に際してのぐい挨拶

附属健康未来イノベーションセンター 教授 三上達也



令和三年八月一日付で健康未来イノベーションセンターの教授を拝命いたしました。この場をお借りして、これまでお世話になった全ての皆様に心から御礼申し上げます。

私は青森県八戸市出身で、八戸高校を卒業後に本学に入学いたしました。大学では、初心者でしたが軟式庭球部（現ソフトテニス部）に入りました。誇れる成績は収めておりませんが、毎日のように汗をかき、東医体で毎年、先輩、後輩と軽井沢まで車で行って合宿していたのは良い思い出です。

平成五年に吉田豊先生の第一内科（現・消化器血液内科学講座）に入局し、棟方昭博先生のもとで学位を取得いたしました。大学院卒業後は、附属病院と主に県内の自治体病院で勤務し、平成十八年から附属病院の消化管診療を任せていただき、三年間の弘前市立病院勤務を経て、平成二十四年からは光学医療診療部でお世話になりました。長年、肉体労働者として働いてきましたが（笑）、私

入局後からこれまで、臨床・研究はどちらのことも、精神面も鍛えて（？）ご指導くださったのは福田眞作先生（現学長・消化器血液内科学講座教授）です。改めて感謝申し上げます。そんな私ですが、縁あって昨年の十一月に健康未来イノベーションセンターに異動し、地域の健康づくり部門長として働くことになりました。消化管癌の早期発見から短命県返上を目指しておりましたが、今後はグローバルな視点から短命県返上および県民の健康づくりに貢献していきたいと思っています。コロナ禍ではありますが、岩木健康増進プロジェクト、いきいき健診などを継続して運営するとともに、啓発型健診（QOL健診）、地域・職域における健康リダーの育成など、同じ消化器内科学出身である大先輩の中路重之セン

教授就任に際してのぐい挨拶

信州大学医学部 耳鼻咽喉科学教室 教授 工 穰



令和三年六月一日より信州大学医学部耳鼻咽喉科学教室を担当させていただきます。教室となりまして、謹んでご挨拶申し上げます。弘前大学を離れて二十年が過ぎましたが、今回このような寄稿の機会をいただけることとなり、大変光栄に存じております。

私は青森県十和田市出身で、八戸高校を卒業後、昭和六十三年に弘前大学医学部に入學しました。在学中は軟式テニス部に所属していましたが、当時は東医体二年連続団体準優勝、北医団体二連覇を達成された現医学部長の廣田先生らが卒業された直後であり活気に満ちていて、夜遅くまでボールを追いかけて真っ黒に日焼けしていました。また、長が築いてくださった幅広い活動を通して、県民の健康寿命延伸に向けて活動して参ります。COIは今年度で終了いたしますが、COLNEXTを見据え、今後も継続的に発展させていく必要があります。そのためには各講座・共同研究講座の皆様のご協力が不可欠であります。今後ともご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

た毎年の東医体が軽井沢の風越コートであるため、夜通し交代交代で運転していった事を覚えております。当時はまさか信州で働くことになるとは思いませんでした。

平成六年に卒業後、弘前大学医学部耳鼻咽喉科学教室（新川秀一教授）に入局し、平成九年よりオスロ大学神経解剖学教室（Utahashi教授）にて後包埋免疫金標識法を用いた電子顕微鏡解析による内耳や脳（海馬）の研究を行いました。帰国して学位取得後、大館市立病院で医長を勤めておりましたが、当時助教でいらっしゃった宇佐美真一先生が信州大学の教授に就任されたこともあり、その一年後に信州大学へお世話になることとなりました。信州大学へ来てからしばらくはNASAでのスペースシャトルを利用した宇宙実験を中心とした研究を行っていましたが、シャトルの事故などもあり、その後は大学で頭頸部腫瘍や耳科・鼻科手術の研究を積みました。近年は頭頸部がん専門医暫定指導医として頭頸部腫瘍の手術・指導、頭頸部がん専門医の育成を行い、また同時に耳科手術暫定指導医として耳科疾患の手術・指導、耳科手術専門医の育成を行って参ります。さらに反回神経麻痺患者に対する音声改善手術（披裂軟骨内転術、甲状軟骨形成術）を県内で唯一行っております。（特にこのコロナ禍におい

て）長野県の患者さんやご家族が安心して信州大学で治療に望むことができるよう多彩な疾患に取り組んでおります。

信州大学医学部耳鼻咽喉科学教室は昭和二十四年に開設され、今年で七十三年目になります。初代の鈴木篤郎教授、第二代の山口喜一郎教授、第三代の宇佐美真一教授と受け継がれ、私で四代目となります。これまでの素晴らしい歴史・伝統を継承しつつ、「患者さ

退職にあたってのぐい挨拶

脳神経外科学講座 前教授 大熊 洋揮
（現国立病院機構弘前病院 院長）



一九八三年の弘前大学医学部卒業後、脳外科医として活動し三十七年が経過しました。脳神経外科は3K職種（苦、汚、危険）の代表の一つのように思われていたから、これまでの間、「何故脳外科医になったのか？」という質問を様々な方から受けてきました。しかし、本音を語ることの気恥ずかしさから、「今度じつくりお話しします」という返事でお茶を濁しその場をやり過ごし

てきました。思えば高校三年で文系から理系（医学部）志望に転向した時から脳外科医になると決めていました。当時、青春期特有の苦悩に対する答えを求め様々な文芸書、哲学書、宗教書の中を徘徊していた頃、あらゆる概念をも認識できる「脳」の偉大さに気付かされたのでした。丁度そうした折、その素晴らしい「脳」を生まれながらに持ち得ない脳障害児達の報道番組にたまたま遭遇しました。受けた衝撃と空虚感から、こうした脳障害を自分の手でつまみ手術で治せないかと考えたのが発端でした。今思えば全く若気の至りで、医学常識のない荒唐無稽な考え

に冷や汗ものです。結局、医学部進学は医師になることというよりは脳外科医になることが目的であったと言えます。

医学部六年生の臨床実習の脳神経外科最終日、仲間とともに鈴木重晴助教（当時）の部屋をノックしました。入局志望を告げると鈴木先生には大層喜んでくれましたが、その日は都合が悪かったらしく「入局祝いにみんなで飲みに行きなさい」と仰り財布からの大枚を手渡されました。その大枚と置換された実習仲間の胃袋に収まったアルコールと引き換えに脳神経外科入局が決定しました。その後、大学院ではラ

（次ページへ続く）

(前ページより)

イフワークとなるくも膜下出血研究の指導を鈴木先生から頂き、多くの一線病院勤務では臨床修行に汗水を流し、後半生の大学病院生活では教室運営に四苦八苦しているうちに気が付くと瞬く間に時が過ぎ今日に至っています。

この度、福田学長はじめ大学上層部のご指導で、国立病院機構弘前病院に勤務することとなり六月三十日で大学を退職いたしました。これまでの長い間、数え切れない方々に大変お世話になりました。ここに厚く御礼申し上げます。そして、何とか教授職を全うできたのは一騎当千とも言える教室員が支えてくれたお陰であり、彼らに対する謝意も記させて頂きます。七月から着任しました国立病院機構弘前病院は来年四月に弘前市立病院と統合し弘前総合医療センターとなります。その際には大学病院の先生方の協力が不可欠となります。今後ともご支援ご指導の程よろしくお願い申し上げます。

さて、メスでは脳障害進行を防ぐことはできても、当初胸に描いた脳障害の回復は不可能であることを長い脳外科医生活で充分に悟りました。しかし、現在、神経の傷害は再生医療(神経再生)により治癒することが決して夢ではなくなりました。脳外科医を目指した時の想いが現実化する可能性のある今日、あと二十年遅く生まれていればと思うこの頃ではあります。人生一期、その進展を楽しみに傍観いたしたいと思ひます。

日本耳鼻咽喉科学会

耳鼻咽喉科教育・育成功労賞2020を受賞して

耳鼻咽喉科学講座 教授 松原 篤

令和三年五月十二日から十五日にかけて国立京都国際会館で開催された第百二十二回日本耳鼻咽喉科学会総会において、耳鼻咽喉科教育・育成功労賞2020を受賞いたしました。この賞は長い歴史のある日本耳鼻咽喉科学会で今年初めて創設された賞です。その背景の説明を含めてご報告いたします。

前・卒業教育委員会担当理事の藤枝重治先生により、耳鼻咽喉科への勧誘および専攻医育成のために優れた取り組みを行っている医療機関代表者を対象として、耳鼻咽喉科教育・育成功労賞が制定されました。この賞は、卒前・卒後の耳鼻咽喉科医の教育・研修・指導の一層の向上および発展に寄与することを目的としたもので、今年初めて賞の選考が行われました。

本年五月、第三十九回日本脳腫瘍病理学会におきまして、附属病院病理部元助教小川薫先生が学会賞を受賞しました。小川先生は二〇一八年にも本学会ポスター賞第二席を受賞しています。

日本脳腫瘍病理学会は、脳腫瘍の診断、治療、研究に携わる脳神経外科医、病理医、神経内科医、神経放射線科医、研究者で構成される学会で、脳腫瘍の病理学的、分子遺伝学的研究、画像を用いた脳機能解析等により、脳腫瘍の正確な診断法と治療法を確立することを目的としており、日本の脳腫瘍の医療と医学の中心を担う学会です。学会賞は学会の発行する国際誌Brain Tumor Pathology (巻35)に投稿された論文から毎年一件、最も優秀な論文が厳正に審査されて選ばれ、キャッチコピーも提出して受賞に至りました。

私が教授に就任した直後は大学の医師が七名まで減り、青森県の耳鼻咽喉科医療崩壊の瀬戸際まで行きました。しかし現在では地域の基幹病院の常勤医も増やすことが出来て、やっと地域医療に貢献できる体制を作りつつあります。これでも人数が少ない中で頑張つて耳鼻咽喉科の魅力を伝えてくれた、講座の皆と関連病院の耳鼻咽喉科のスタッフの努力のお陰です。この場を借りて心から感謝申し上げます。

われわれ病理診断科は、病理の立場から臨床医療に貢献することを使命とし、臨床現場で真摯に取り組む臨床医を最大限支援して医療医学の発展に繋がることを願っています。臨床医が常に入り出して、病理医や細胞検査士と一緒に顕微鏡をのぞきながら病態をディスカッションするだけでなく、サロンの会話する、こういったことが正しい診断や相互の向上に繋がっていくと確信しており、こんな場を提供することが病院病理の大事な役割だと思っています。また、学会や論文発表、研究への協力も、出来ることはお手伝いしたいと思っています。

2021年日本脳腫瘍病理学会

小川薫先生、学会賞受賞

病理診断学講座 教授 黒瀬 顕

弘前大学では過去六年間に全国の耳鼻咽喉科で専門研修を開始した医師を、当校卒業生から三十二名(うち二十三名が弘前大学耳鼻咽喉科で専門研修を開始)輩出していました。これは、聖マリアンナ医科大学の三十六名に続いて全国二位にあたります。また、当科の特色ある教育・研修内容として、扁桃摘出術などの口腔手術に本邦で始めてVITOMシステムという外視鏡を取り入れたことも評価されました。扁桃摘出術は新人医師が最初の手術として担当することが多い割に、術野の視野が悪いことが指導医にとっても術者にとっても難点でした。この外視鏡画像システムを用いることにより、今まで術者の肩越しでしか見えなかった口腔の手術操作が大きな画面上に拡大されてハイビジョンで鮮明に表示され、新人医師の指導と更には学生教育に大きく役立っています。申請の際には「見せて魅せる」という

このたび日本医学放射線学会のホームページにある「雑誌Japanese Journal of Radiology: JJR」の優秀査読者として「JJR Excellent Reviewer Award in 2020」を受賞し、令和三年四月十

五、十八日に横浜市で開催された第八十回日本医学放射線学会総会において授賞式が行われました。今回の受賞は多くの査読を遅滞なく行ったことが評価されたのだと思います。ただ、研

究発表での受賞とは異なり、査読者としての受賞に気恥ずかしさを感じています。これも、査読が公表されない裏方作業であるからです。論文は公表・掲載前(次ページへ続く)



第百二十二回日本耳鼻咽喉科学会総会開会式 耳鼻咽喉科教育・育成功労賞表彰式より。村上信五理事長(写真向かって右)と藤枝重治理事(写真左)、ならびに他の4大学の教授と共に(筆者中央)。

日本医学放射線学会

「JJR Excellent Reviewer Award in 2020」を受賞して

放射線診断学講座 教授 掛田 伸吾



究発表での受賞とは異なり、査読者としての受賞に気恥ずかしさを感じています。これも、査読が公表されない裏方作業であるからです。論文は公表・掲載前(次ページへ続く)

(前ページより)
に予め数名の専門家(査読者: reviewer)の評価を受けます。この作業が査読であり、この評価をもとに編集者(editor)は雑誌掲載の採否を判断します。査読には、論文のインパクト(重要性)の評価だけでなく、用語の適切な使用、誤字脱字のチェックも含まれますので、根気のいる地味な作業といえ、モチベーションの維持も大変です。

雑誌にとって、査読者は最良の愛読者でもあります。ちなみに、私が本雑誌の愛読者となったのは最近です。これには、近年のアジアにおける放射線科学の急速な発展が影響しています。現在、韓国放射線科学会誌はImpact Factor(以下IF: 学術雑誌の影響度を評価する指標)が32であり、中国の先生方は論文数、国際学会発表数など世界の放射線科学を牽引しています。これからは、欧米



だけでなく、アジアから発信される最新画像情報に意図を向ける時代になったといえます。このような変化は、日本の放射線科医が危機感を共有しホームジャーナルの改革に取り組む良いきっかけにもなりました。我々は、優れた論文や総説の掲載だけでなく、優秀な査読者(愛読者)の育成にも尽力しています。二〇一

この度、原著論文「血清亜鉛及び銅濃度に対し経口摂取量や*Helicobacter pylori*感染が与える影響についての検討」で日本消化吸収学会、第五十一回「味の素賞」をいただきました。

論文であり、生体内で生命活動に欠かせない必須微量元素のうち、種々の酵素構成因子としての働きや酸化ストレスの除去の働きなどに関わる亜鉛と銅について注目をしました。特に亜鉛については全世界的に猛威

を振るう新型コロナウイルスにおいて、増殖に関わるRNAポリメラーゼの働きを阻害することや低酸素状態による臓器障害を軽減する働きが報告されており、タイムリーなタイミングで発表できたと思います。亜鉛と銅は胃十二指腸潰瘍や胃癌との関連が広く知られている*H. pylori*との関わりがあることが報告されておりありますが、実際の一般住民を対象にした大規模な検討の報告はありませんでした。そのため本学で行われている岩木健康増進プロジェクトに参加させていただき、その中で性別・年齢別に*H. pylori*感染状態と経口摂取量で血清濃度にどのような影響を与えるについて比較検討を行いました。結果は亜鉛においては



高齢者で*H. pylori*感染持続者は除菌成功者よりも血清亜鉛濃度が低い傾向が見られ、長期間の*H. pylori*感染が影響を与えていることが考えられました。一方で除菌成功者と未感染者では差がなく、除菌治療により血清亜鉛濃度が改善する可能性が示唆されました。銅については除菌成功者、未感染者、感染持続者で差がなく、亜鉛と比較すると*H. pylori*感染の影響が少ないことがわかり、報告に至りました。

研究を御指導いただいた、福田眞作教授、珍田大輔先生をはじめとした消化器血液内科学講座の先生方、中路重之特任教授をはじめとした社会医学講座の先生方、青森県総合健診センターの下山克先生、多くの方々に改めて御礼申し上げます。この受賞を励みにして日常の臨床、研究に邁進していきたいと思えます。今後とも御指導、御鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

味の素賞を受賞して

三沢市立三沢病院内科 秋田谷 一輝

(消化器血液内科学講座所属)

『17th Korea-Japan Joint Symposium on Helicobacter Research Young Investigator Award』を受賞して

消化器内科、血液内科、膠原病内科 医員 安田 耕平

二〇二一年三月二十日にソウルで開催された、ヘリコバクター学会における第十七回韓日ジョイントシンポジウムでYoung Investigator Awardを受賞致しました。初の国際学会でしたが、コロナ禍のためZoomでの発表となりました。現地に行けなかったことが悔やまれますが、今回

このような名誉な賞をいただき、大変光栄に思います。青森県は全国的にも胃がん死亡率が高く、一次予防としての取り組みが求められます。胃がん発生の主因は*Helicobacter pylori* (*H. pylori*) 感染であり、*H. pylori*感染者の診断、早期の除菌が重要となります。青森県の胃がん死亡率を減ら

するための多施設共同研究「Risk Investigation of Gastric cancer and Observation after eradication study: RINGO study」は、二〇一三年七月から始まり、一年間で約千二百症例が登録されました。本研究では登録時に*H. pylori*の感染診断、胃がんリスク検診を行い、上部消化管内



を評価します。組み合わせにより、胃がんの低リスクであるA群から高リスクのD群まで四群へ分類されます。五年間の追跡調査で、C群の体重増加者では、血清PG II濃度が低値であることが明らかになりました。このことから、胃粘膜萎縮の改善が体重増加に寄与した可

最後に、本発表において貴重な機会を与えていただき、ご指導くださった福田眞作教授、下山克先生、珍田大輔先生に心より感謝申し上げます。

優秀演題賞を受賞して

高度救命救急センター 医員 星 健太郎

私は卒後六年目で消化器血液内科学講座所属です。現在は半年間の予定で当院高度救命救急センターに向しております。二〇二一年二月六日当講座を主管としてWEB開催された地方会で優秀演題賞を受賞しましたので、ご報告致します。今回発表したタイトルは、「Downhill

esophageal varices 破裂を呈した血管Behcet病の1例」です。Downhill esophageal varicesは、上大静脈症候群の側副血行路として形成される食道静脈瘤であり、門脈圧亢進症に由来する遠心性とは逆方向に血流が向かいます。原疾患として、血管Behcet病、肺癌、甲状腺癌、縦郭腫瘍などがあ

り、心臓ベースメーカー植え込み後の報告も認められます。原疾患に対する治療が重要ですが、本症例の様に破裂した場合には止血術を要します。本邦文献報告上、本症例は十六例目であり、診断から治療に際し、眼科、皮膚科、放射線診断科、心臓血管外科の先生方(次ページへ続く)

日本消化器病学会第210回東北支部例会
特別企画Ⅱ 目指せ！消化器専門医〜後期研修医からの報告

(前ページより)
にご尽力いただき、現在免疫抑制剤内服で病勢コントロールを得ております。
地方会は、大勢の前で発表し意見交換し合う貴重な場であるとともに、その土地の文化に関する見分を深める良い機会です。コロナ禍で多くの領域でリモートワークが可能であることが分かってきましたが、その点では残念な部分もあります。ですが、本年COVID-19診療の大変さを経験し、医療従事者として可能な限り感染リスクの低い行動を取る必要性を感じております。

兎に角COVID-19の早期収束を願うばかりです。
この度は、診断から治療にご尽力いただいた眼科、皮膚科、放射線診断科、心臓血管外科の先生方、発表に際しご指導賜りました指導医の先生方に厚く御礼を申し上げます。また、本誌寄稿の機会を下さいました広報委員会の先生方に感謝申し上げます。



論文賞は海老名(高林)杏奈先生(産科婦人科学講座、大館市立総合病院産婦人科)の「Carbonyl reductase 1-overexpressing exosomes inhibit proliferation of ovarian cancer cells」(Hiroaki Med. J. 2020;71(2-4):120-130)が選出され、『弘前医学』編集委員会委員長・田坂定智先生から選考過程についてご説明があった後、授与式が行われました。続いて弘前大学大学院医学研究科・掛田伸吾先生(放射線診断学講座・教授)から「弘前医学から見た放射線診断学の話題」という演題で特別講演のご講演をいただきました。放射線診断医の育成から始まり、AIを駆使した最新の画像解析法の紹介にまで及ぶ非常に聞き応えのある素晴らしいご講演でした。さらには放射線診断のアウトソーシングの議論もあり、会場からは多くの質問が寄せられました。

第104回 弘前医学会総会

弘前医学会庶務幹事 伊東 健
(分子生体防御学講座 教授)



特別講演 (掛田伸吾教授)

行われました。一般演題発表後に、優秀発表選考委員会(選考委員長:高橋道長先生(十和田市立中央病院院長))が開催され、小笠原拳斗先生(十和田市立中央病院整形外科)が発表しました。今年度の弘前医学会総会は、南黒医師会会長・関場慶博先生の下、令和四年六月四日(土)藤崎町文化センターで開催予定です。多くの方々のご参加をお願い申し上げます。

第104回弘前医学会総会 優秀発表賞を受賞して

十和田市立中央病院 整形外科 小笠原 拳斗

ことができました。まず内容を簡単に紹介させていただきます。

要介護となる原因として骨折・転倒は非常に高い割合を占めており、これらへの対策は重要な課題となっております。その一つとして

評議員会・総会開催の後、一般演題六題の発表がなされました。しかし明確な原因はまだ分からず、この治療法はまだ世間に広まっていないわけではなく施行できず、施設も多くありません。実際にHBOを施行する処置室を見学しましたが、HBOを行うカプセルがあり臨床検査技師の方が医師の指示のもと操作と管理をしていました。設備と人材を必要とするため施行できる施設は限られており普及することは難しい現状です。

今後普及していくためにも本症例が医療従事者の間でも認められ広がっていくことを願います。本症例を発表し受賞することができ、名誉なことでもあります。このような機会をいただき経験と知識をつけることができたことに感謝します。

優秀演題賞を受賞して

「めざせ!! 消化器内視鏡専門医」

附属病院 研修医 梅村 芳史

この度、第百六十五回日本消化器内視鏡学会東北支部例会のレジデントの部に於いて「高圧酸素療法が放射線性食道潰瘍および高度狭窄に著効した1例」で優秀演題賞を受賞させていただきました。発表するきっかけとなったのは、弘前大学で研修中に学内の先生方にお声をかけていただいたのが始まりでした。今まで学会発表をしたことがなかったため不安もありましたが、これからの医者人生に必ず必要な経験であると再認識し二つ返事で発表参加を決めました。



狭窄し、ステント留置も検討したがCRT後では出血や穿孔のリスクが高く万策尽きた状態でした。その中論文で高圧酸素療法(HBO)は侵襲性が低く直腸潰瘍に著効したという報告を知り、他に治療選択肢もなかったことから本症例にも適応する方針となりました。その結果著明に潰瘍は治癒しており、浮腫も改善していたことから食道狭窄も解除することができました。本症例のポイントは放射線性食道潰瘍にHBOを施行した初の症例であり、低侵襲に治療を成功することができたことです。機序としては細胞内の酸素濃度を上昇させることで、創傷部での成長因子上昇により血管新生、治癒を促進させることなどが考えられています。

第104回 弘前医学会総会



優秀発表賞
(小嶋泰彦総会長 小笠原拳斗先生 高橋道長選考委員長)

組みが始まったのは二〇一八年からであり今後のデータの蓄積は必要ですが、現段階では骨粗鬆症の治療継続率の上昇や、大腿骨近位部骨折症例の減少を認めております。

研修医になって一年経ちましたが、この一年間は少しでも仕事ができるようにと臨床にばかり目が行きがちでした。今回学会で発表させて頂いたことで、研究とその成果を発表する楽しさが少しわかったような気がしました。また他の先生の発表も拝見させて頂き、発表のスキル等大変勉強になりました。今後自分が医師として働いていく中で、こういった学会発表の機会は少なくないと思います。が、今回感じた楽しさや学んだスキルを忘れずに今後に取り組んでいきたいです。

第104回弘前医学会 優秀論文賞を受賞して

大館市立総合病院 産婦人科 海老名 杏 奈

この度は第百四回弘前医学会優秀論文賞に選出しいただき誠にありがとうございます。受賞論文は、『Carbonyl reductase 1-overexpressing exosomes inhibit proliferation of ovarian cancer cells』です。所属している弘前大学産科婦人科学講座で横山良仁教授のご指導のもと以前から行われている卵巣癌の増殖とCarbonyl reductase 1 (CBR1) に関する研究の一つです。卵巣癌は、女性の

た。そこで今回は、Drug delivery toolとして他疾患への応用が報告されているexosomeに着目した研究を行いました。結果は、CBR1過剰発現exosomeを作成することができ、そのexosomeを卵巣癌細胞に加えることで、増殖抑制を確認することができました。私にとっては初めての基礎研究であり、細胞の培養の仕方から本当に一から始めている先生方からすると、とても簡単であろうことで、何度も失敗しながら少しずつ前に進むという感じ

でした。原因がよくわからないままに失敗を繰り返して、本当に結果が出るのだろうかと思うことも何度もありました。

最後になりますが、ご指導いただいた横山良仁教授、大学院生として一緒に研究をしながら、色々と教えていただいた横山美奈子先生、基礎的な技術の指導をしていただいた保健学研究科の堀江香代先生をはじめとする今回の研究にご協力下さった全ての皆様に心から感謝申し上げます。

令和3年 鵬桜会総会に出席して

鵬桜会理事 今 泉 忠 淳
(脳血管病態学講座 教授)

令和三年五月二十九日、令和三年年度の鵬桜会総会が、弘前市のホテルニューキャッスルにおいて開催されました。柿崎良樹常務理事(昭和五十四年卒)の司会のもと、物故会員に対する黙祷を行い、その後、西澤一治理事長(昭和四十六年卒)の挨拶がありました。つづいて、大山力弘前大学医学部附属病院長(昭和五十九年卒)、福田眞作弘前大学長(昭和五十六年卒)の挨拶があり、附属病院および弘前大学での新型コロナウイルス感染症対策の取り組みなどが紹介されました。八木橋勇治監事(昭和四十八年卒)から監査報告、須藤武行常務理事(平成四年卒)から決算報告、澤田美彦常務理事(昭和五十二年卒)から庶務・事業

令和3年度 医学科教育FD (医学教育分野別評価に関するFD)

学務委員長 鬼 島 宏
(病理生命科学講座 教授)

令和三年九月七日に、Microsoft TeamsによるオンラインWeb開催にて医学科教育FD (Faculty Development) が開催されました。今年九月十四日(火)十七日(金)に弘前大学医学部は、国際認証として日本医学教育評価機構(JACME)の医学教育分野別評価を受審します。今回のFD

Dは受審に先駆けて、国際認証に關しての理解を深めることを目的としました。

医学教育分野別評価受審にあたり、二百八十三頁にも及ぶ「弘前大学医学部医学科・自己点検評価報告書2021(令和3年度)」が作成されました。この報告書に準じて、FDも行われました。冒頭に、廣田和美 医学研究科長より、全体説明がなされました。その後、領域1(領域9について受審当日の担当者が分担で説明を行いました。

令和3年度

実験動物慰霊式

附属動物実験施設長 上 野 伸 哉
(脳神経生理学講座 教授)



新型コロナウイルス感染症の影響で令和二年度中止とした実験動物慰霊式を二年ぶりに六月十八日に執り行いました。慰霊式の後の記念講演に際し、新型コロナウイルス感染症対策として、参加した医学科三年次学生は密にならないように、基礎大講堂において座席の間隔を開けて着席、教職員の方々は、基礎第一講義室の別室に集合とし、基礎大講堂の講演内容を同時配信という形をとりました。記念講演は弘前大学農学生命科学部 国際園芸農学科 教授・松崎正敏先生にお願いしました。「小さく産ませても、しもふりに」ヒツジモデルを用いた試行錯誤「」のタイトルにて、妊娠時期からの栄養制御により、産まれてくる畜産動物(子牛など)の小型化とその後の成長を促進させ、短期間の肥育で商品価値の高い成獣を作るアイデアを紹介いただきました。初期成長期の栄養制御による家畜の生産能力の向上の研究で、大型動物における実験処置や、胎仔を得るにも長

(次ページへ続く)

○令和3年度科研費 申請・内定状況（新規）

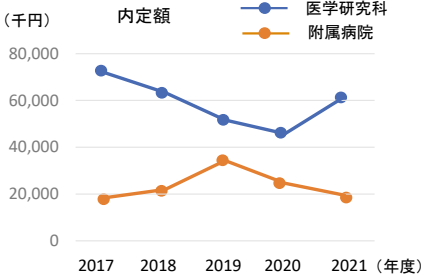
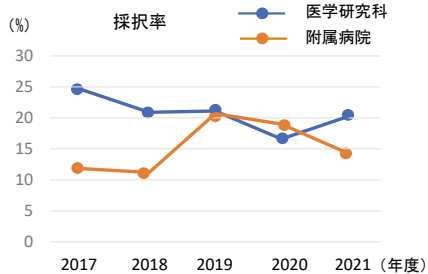
部局名	申請件数	採択件数	採択率(%)	交付内定額(千円)
医学研究科	170	35	20.6%	62,090
医学部附属病院	113	17	15.0%	20,400
計	283	52	18.4%	82,490

○令和2年度科研費 申請・内定状況（新規）

部局名	申請件数	採択件数	採択率(%)	交付内定額(千円)
医学研究科	163	27	16.6%	45,760
医学部附属病院	109	19	17.4%	24,570
計	272	46	16.9%	70,330

○令和元-3年度科研費 研究種目別内定状況（新規）

研究種目名	医学研究科			医学部附属病院			合計		
	R1	R2	R3	R1	R2	R3	R1	R2	R3
基盤研究（S）							0	0	0
基盤研究（A）							1	0	0
基盤研究（B）		1	4				1	1	4
基盤研究（C）	20	14	23	7	8	6	26	22	29
特定領域研究							0	0	0
新学術領域研究							0	0	0
挑戦的研究（開拓）	1						0	0	0
挑戦的研究（萌芽）		1					0	1	0
若手研究	10	10	7	18	11	9	20	21	16
研究活動スタート支援		1					0	1	0
特別研究促進費							0	0	0
研究成果公開促進費							0	0	0
特別研究員奨励費							0	0	0
奨励研究			1			2	0	0	3
合計	31	27	35	25	19	17	48	46	52



分子生体防御学講座 教授 伊東 健

この調子でのV字回復を！

令和3年度 科学研究費補助金採択状況

医学研究科および附属病院における令和三年度の科学研究費採択状況が公表さ

れました。まずは付表をご覧下さい。平成二十九（二〇一七）年度から新規採択

獲得支援の成果が早くもでたものと推察され、大変素

の実績の五年分の推移およびその内訳を表で示させていただきます。医学研究科では交付内定額が約一千六百万円ほど増加しました。基盤B獲得者が今年度は四人となつていますので、この結果が反映されたものと思われま

（前ページより）
期間かかるなど、医学系の実験で使うマウス・ラットとは異なる研究アプローチを実感できる貴重な講演となりました。動物愛護法の対象となる動物は、実験動物のみならず、家庭動物（ペット等）、展示動物（水族館、動物園など）、産業動物（家畜など）がありま

となる時代です。今後とも実験動物慰霊式に合わせ、動物実験倫理や、動物実験に関連するトピックスを中心とした講演会を開催しますので、教員の方もぜひご参加ください。また、本年は動物実験施設の改修工事が終了し、六月二十日から全館の利用を再開しております。今後も、動物倫理、動物福祉を考慮した動物実験の実施をお願いします。



晴らしいことと思います。附属病院では若干交付内定額の低下が観察されました。また、今回は過去五年分の採択率と交付内定額の推移を示させていただきますが、附属病院の結果を見ると採択件数、交付内定額ともに顕著な傾向はないと思われま

令和3年度 弘前大学 成績優秀学生表彰

学務委員長 鬼島 宏
(病理生命科学講座 教授)

成績優秀学生表彰は、各学部（医学部は医学科・保健学科）の各学年で前年度の成績が優秀であった学生を表彰する取組みで、平成二十一年度

学部学生については履修科目の平均点をもとに選抜されました。昨年度は、新型コロナウイルス感染症対策の中、メディア授業が中心の科目もあり、例年とは異なった履修環境で苦労も少なく

令和3年度 弘前大学成績優秀学生

医学部医学科2年	横田 麗奈
医学部医学科3年	吉岡 夏実
医学部医学科4年	三好 真代
医学部医学科5年	村上 花香
医学部医学科6年	前田 瑞恵



コラム 医学部 こぼれ話：：

全世界は、二〇一九年十二月八日に「新型コロナウイルス」と命名されたCovid-19のパンデミック渦中にあり、多くの人々は行動制限・移動制限等のストレスにさらされながら日々を過ごしている。二〇二一年八月十五日現在、日本人感染者総数は約百五十万人、一五

一年遅れで開催された東京オリンピック2020によって、我々が得たもの・失ったものは何であろう。米国「ワシントンポスト」紙は、「日本は、あらゆる批判にもかかわらず、パンデミックの真つただ中でも、オリンピックが開催できることを証明した。（中略）」、そのアスリートの謙虚さ、優雅さ、喜びは世界中の心を照らした」と評価的コメントを掲載する一方で、「今大会は日本に傷跡を残した。分裂と不信、健康的及び経済的債務を引き起こした」とも伝えている（八月十一日Aera dot.より引用）。

青森県知事と新入生・ 二年次学生との懇談会

学務委員長 鬼島 宏
(病理生命科学講座 教授)

三村申吾青森県知事と弘前大学医学部医学科学学生との懇談会は年二回行われています。県知事と医学科学生との定期的な懇談は、全国的に見ても極めて稀で貴重な会となっております。春は新入生を対象に、秋は五年生を対象としたものです。この懇談会がスタートしたのは平成十七年のことであり、その後、十七年にわたり連続して開催されています。昨年の新入生との懇談会は、新型コロナウイルス感染症拡大のために中止となりました。このため、今回の懇談会は、新入生・二年次学生を対象とし、令和三年四月九日に医学部基礎大講堂・基礎講義室で実施されました。

当日、講演の冒頭に青森県内の感染状況の説明があり、医療関係者への感謝と応援のメッセージが伝えられました。その後、青森県



基本計画「選ばれる青森」への挑戦（二〇一九～二〇二三）に基づき、地域を支える保健・医療・福祉一体化システムを築くために、さらには青森県の医療の未来に明るい展望を持つために何をすべきかの説明がなされました。平成十七年から継続している「弘前大学と連携した県の取り組み」が紹介され、医療従事者の育成・定着が確実に成果を上げていることが示されました。また、「良医を育むブランドデザイン」に基づいて医師が学ぶ環境を整えていることが示され、青森県と弘前大学医学部・関係医療機関が連携し、地域医療を志す医師のキャリアアップをサポートしてゆることが強調されました。

知事の講演の後は、県スタッフも加わり、学生との活発な意見交換が行われました。学生からは、昨今の新型コロナウイルス感染症の情勢や、公衆衛生医師（行政医師）の役割などに関する質問なども出され、和やかな雰囲気の中でも活発な意見交換がありました。

現在、青森県からの寄附講座として総合地域医療推進学講座が設置されており、超高齢化や新・専門医制度を踏まえ、弘前大学を起点とし県内の大小医療機関を循環する本県オリジナルの地域循環型医師育成システムに関する総合的な研究を通じて、地域医療の充実に寄与することを目指しています。これに基づき、新入生・二年次学生の多くが卒業後に青森県に定着し、大学が担う教育・研究機能の一翼を担ってくれることを期待しています。

学生だより

学生だより 弘前大学に入学して

弘前大学に入学して

医学科一年 安藤 舞佳



今年度は、昨年度に比べ、新型コロナウイルスによる大規模な外出制限が緩和され、入学式を無事終えて始まった大学生活でした。感染症対策の一環として、例年よりも開始時期は遅れましたが、勉学、生活等に対する期待と不安を抱えつつも多くの友人ができました。

学業においては、多種多様な科目の中から自分の興味・関心に合わせて受講することができるということが高校までの学びと大きく異なる部分だと思いました。どの教科も自分にとっては未知の世界で、自分の視野が広がっていくことを実感することができました。専門科目を学ぶことはもちろん

弘前大学医学部に入学しての抱負

医学科一年 三上 翔生

弘前大学に入学して約四ヶ月が経ちました。受験期と異なり、時が経つのが早いように感じます。一方で、数ヶ月の間に新しい友達ができたと、部活動に入学したこと、新型コロナウイルスによる休校やオンライン授業など、良くも悪くもいろんなことがありました。少ないながらも医学の専門授業も始まり、初歩的な医学知識や医師としての然るべき態度などを学習しました。一方で、科目ごとに成績に対する評価方法が異なり、課題の提出頻度もまちまちのため、最初はスケジュール管理をすることに苦労しました。やらなければならぬこと、やりたいうことをバランス良くこなしていく能力が培われた数ヶ月だったと思います。

部活・サークルについては、尊敬できる先輩方とともに活動できることが何より楽しいです。今年度は対面の機会が増え、多くの人と直接交流できるようになりました。様々なバックグ

には大勢の中の一人の患者さんと思わず、一人の中の一人の患者さんという意識を持つことでより精神面にも寄り添える医師になれると思います。三つ目の医師像については現在の医療技術は非常に進化しています。が、治療ができない病気もあります。最近、臨床医学入門という授業で大学病院内の七夕の願いごとを見る機会がありました。その授業では、治療のできない病気の患者さんやその家族がどのような気持ちで治療を待ち望んでいるのかを思い知りました。だから、そのような患者さんを救えるよう、治療法を開発できる医師を目指したいと思っています。

私はなりたい医師像に近づけるよう、大学時に勉学に励み、かつ学校生活やアルバイトなどの社会経験、部活動などを通して人間的にも大きく成長したいと思っています。

学生だより BSLについて

BSLについて

医学科五年 平木 克樹

三月からはじまった臨床実習（BSL）も早五ヶ月が経ちました。去年の臨床実習は、新型コロナウイルス感染症の影響で、一時的にインターネットを利用した遠隔実習への変更を余儀なくされました。その後、ピーク時に比べて感染者数は減少傾向になり、対面式の実施に向けての先輩方の働きかけや、実習に携わる先生や学務の方々、そして

何より患者さんのご理解とご協力があった病院実習が再開されたのも記憶に新しくあります。現在の対面式での臨床実習は、実現に向けてご尽力頂いた様々な方のおかげでできていることに對して、この場を借りて感謝申し上げます。また、私自身も今まで以上に感染対策に気をつけながら万全な体調で実習に臨めるよう努

(次ページへ続く)

（前ページより）
めてまいります。
実習が始まってみると、臨床実習とは、座学で学んできた知識を再確認する場というよりも、医師として働く上で必要なことを学ぶ大切な機会を与えて頂ける場であることを実感しました。医療とは、医師同士の連携だけでは成り立たず、看護師さんや栄養士さん、他のコメディカルスタッフの方々との連携があつて初めて成り立つことを病棟での実習を通して改めて学ぶことができました。術場でも同様で、術前の自己紹介から、診療科を越えた先生との阿吽の呼吸の特技や、技師さんとの連携を目の当たりにし、全ての場面でコミュニケーションの大切さ

を実感しました。さらには、患者さんに接する時の姿勢やお声がけも、患者さんを第一に想う気持ちに溢れており、医師とは単なる「病気を診る」専門家だけではなく、「人を診る」職業であるということを再確認することができました。これら学んだことは、教科書などの文字からは読み解くことができない大切な医療従事者の道徳だと思いますし、それを学ぶことができるのも臨床実習の意義であると感じています。
五年次の臨床実習期間も折り返し地点となりました。引き続き、初心を忘れず、これまで学んだ事を最大限に生かして実習に臨みたいと思います。

BSLについて

医学科五年 佐藤 菜津

三月に実習が始まり、五ヶ月が経ちました。低学年の頃は、五年生には国試の知識も完璧で、六年生はなんでも知っているスーパーマンというイメージでした。実習が始まってみて一番感じていることは、「知っていること」と「知識を使えること」は全くの別物だということです。知識を詰め込んで挑んだテストでも文字をみて、考える時間がありました。しかし、実習（臨床の場）では一つ一つをゆっくり考えている時間はなく、いつでも瞬時に記憶の引き出しを開ける必要があります。

実習の一番重要な役割は、点だった知識を線で結び、知恵に昇華することだと感じています。実習中の

BSLについて

医学科五年 柴田 優希

三月から始まった臨床実習は、もう五ヶ月経とうとしています。これまでを振り返り、私が感じたことを三つほど書こうと思います。

まず、生活が大きく変わったということです。四年生までの座学の授業とは異なり、実習は朝が早く長時間となることもあり、予習・復習と合わせると慣れないうちは体力まで消耗されていました。また、五年生は一年間かけ全ての科をローテーションしており、慣れた頃には次の科に移るというサイクルにも苦労を感じることがありました。新型コロナウイルス対策のため現状では実習生の部活動への参加が認められていませんが、実習の後に部活動に行っていたかつての先輩方を思うと、その偉大さ

が、私も同じように思っています。知識を線にするとき、これらの知識はある前提になるからです。多くの弘大生が一生懸命、勉強するであろう病理学もやっておくと後から楽です。何がわかっていて、何がわかっていないかを明らかにして、新しいことも吸収しながら、知識を具体化していく。私のように、体験学習の方が向いているタイプは実習をかなり有意義に過ごせると思います。まずは国試に向けて知識を入れつつ、使える知識、知恵にできるよう、残りの実習期間も大切にしていこうと思っています。

改めて感じています。

生活面では苦労することもありましたが、実習での醍醐味は、実習でしか得られない学びにあると思います。「百聞は一見に如かず」と言うように、目の前に患者さんがいることで、座学の授業や教科書以上に印象が残るため、多くの学びが得られると感じました。また、様々な手技等を実際にやらせて頂く機会もあり、例えば、糸結びをしたり、エコーのプローブを当てたりということとは、実際にやってこそ身につけられるものだと思います。さらに、レクチャーや査問、カルテの記載、レポート課題等を通して学びが得られています。単にこなすように取り組むだけでは時間のみが過ぎ去ってしまうので、実習においては自分で考えて積極的に取り組む姿勢が大事であると思います。最後に改めて実習は多くの人によって支えられていると感じました。一番には、まだ医師ではない私たちを快く受け入れてくださる患者さんのご協力があります。それに加え、お忙しい中ご指導して下さいる先生方、病院の医療従事者の方、さらには毎日楽しく実習を送れている班員などの支えがあつてこそ、実りある実習生活が送れていると思います。周りの協力に支えられているという謙虚な姿勢を忘れずに、残りの実習も有意義なものとなるよう取り組んでいきたいと思っています。

写真コラム(13) 前川國男設計の建築

脳血管病態学講座
教授 今 泉 忠 淳

医学研究科のある在府町の町内に、「木村産業研究所」があります。この建物は、前川國男（1905-1986）の設計で1932年（昭和7年）に建築されたものですが、このたび、**国の重要文化財**に指定されることになりました。

前川國男といってもピンとこない方も多いと思いますが、日本の近代建築の代表的建築家で、建築学の世界では巨匠とも言うべき存在です。前川國男が、留学先のフランスから帰国して、最初に設計したのがこの「木村産業研究所」で、日本の近代建築史の中では記念すべき建物です。前川國男の母親が津軽藩士の娘であったことが縁で、この記念すべき建物が弘前に建てられることになったらしいです。普段、私たちは、この建物のことを特に気に留めもせずに、過ごしていますが、よく見ると、細部はとても凝っている、洒落た建物です。【写真1】はこの「木村産業研究所」の玄関天井の灯です。また、



【写真1】
木村産業研究所
玄関天井

入学式や卒業式で弘前大学がお世話になっている弘前市民会館【写真2】も前川國男の設計です。やはり前川國男が設計した東京・上野の東京文化会館と似ています。医学の学習・修練に多様な日々ですが、時には、前川國男の建築に親しんでみるのもよいと思います。



【写真2】
弘前市民会館2階ロビー

学生
だより

クリニックを終えて

BSLを終えて

医学科六年 中 田 寛 明

クリニックという名前は、大半のスケジュールを終了し、残すところあと二カ月となりました。これまでを振り返り、今の僕が感じていることを記していこうと思います。

一番強く感じていることは五年生までの授業、実習を自分の実力に活かすことが全然できていないということです。医学部の学生はどの学年でもおそらく二年生の時に先生にこんなことを言われると思います。「先輩たちはみんな二年の時に解剖と生理をもっとちゃん」とやればよかったって言っ

ているよ」と。僕も多分に漏れず解剖の先生から同じことを言われていました。が、その意味が今ようやくわかった気がします。当時の僕は骨の名前や筋肉の名前、頭蓋骨の孔の名前などをテストのために必死になつて覚えていましたが、いざ実習をまわってみるとただ図の矢印の場所を覚えただけの知識は全くと言っていいほど役に立ちませんでした。疾患、治療に即していない、全体の流れを理解していないただの絵合わせに意味なんてなかったのです。だから僕も後輩と話

す機会があったらこう言うでしょう、「解剖はちゃんと勉強したほうがいい」と。解剖に限らず、六年生の実習はこれまでの授業や実習とは比べ物にならないくらいたくさんのことを教えていただくことができません。そして一個の新しい知識を得るたびに十個の自分の無知を自覚することになります。あの時もずっと勉強しておけばよかった、そう思わない日はありません。

実習を終えようとしている今、この記事を読んでいる人に伝えたいことは医学部の学生は非常に恵まれていて、ということだと思います。講義をしてくださる先生方、実習先で面倒を見てくださる医師、看護師他スタッフの方々がどれほどの労力を払ってどれほどたくさんの方々に伝えようとしてくれているのかは学生のうちにはなかなか気づくことが難しいと思います。これを読んでいる医学生には指導してくださる方々への感謝の気持ちを大事にしてほしいというのを、そして先生方にはあらためて日頃の感謝の気持ちを綴ることで締めさせていただきます。

臨床実習を終えて

医学科六年 鈴木 夏実

四年次の三月、最初にローテートしたのは腫瘍内科でした。カルテの書き方や身体診察などの基本か

ら、腫瘍の遺伝子診断とそれに基づく治療という、大学ならではの内容も学びま

（次ページへ続く）

(前ページより)

した。研究段階にある領域を目の前の患者さんに適応し、よりよい治療を追究するプロセスと醍醐味を教わりました。また、免疫チェックポイント阻害薬の著しい効果とその特異な副作用が非常に印象的でした。

市中病院での外科や小児科では、手技を体験する機会にも恵まれました。座学で学んだことを臨床で目にし、深い感動を覚えることも多くありました。たとえば、むつ総合病院の小児科で見て触れた「**LA**血管炎の紫斑は一生忘れられません。

「自分は内科系だ」となるとなく思っているのですが、脳外科や整形外科でも大変興味深く学ぶことができました。ナビゲーションシステムを用いた開頭手術では、解剖で学んだ構造物と腫瘍の位置関係が一目瞭然であり、見学していても楽しかったです。見学していると、特徴的な術後合併症が生じる理由も理解できておもしろかったです。

放射線診断科では画像診断を体系的に学ぶことができ、どの診療科に進んでも必要となる知識を授けていただきました。放射線治療科では、実際の治療計画を作成させていただいたほか、副作用や効果の出現時期なども目にし、実習しなければ理解できないことが多かったと感じています。

地域医療実習として訪れた六ヶ所村地域家庭医療センターでは、外来診療や往診、乳幼児健診などを経験しました。地域全体で受け入れてくださり、コミュニケーションと密にコミュニケーションをとることもできました。診療所の規模ならでは一生の経験ができた

大学院生だより

研究室紹介

大学院三年 中川 潤一
(薬剤学)

私は入職前、明治薬科大学大学院で血管平滑筋細胞内のRhoA/Rho kinase系を介したシグナル伝達機構についての基礎研究を行っていました。その際、薬剤学講座前教授の早狩誠先生の元で実験方法について指導していただく機会があり、臨床活動と機器分析による研究の両方ができる環境に魅力を感じ、薬剤部へ入職しました。その後は主にがん化学療法に関する業務に

関与していましたが、二〇一八年からは分析室主任として抗がん剤や抗真菌薬などの血中濃度分析を行い、個別化投与設計に関する業務も行うようになりました。投与設計を行うにあたっては最新の医薬品情報

の知識の他、臨床薬理学に関する知識が必要となります。特に薬物動態学に関しては書籍等を参照し、なんとか学部生時代に学んだことを思い出すというこの繰り返しでしたので、投与設計にはいつも難渋しています。

大学院生だより

大学院四年 反町 悠也
(循環器腎臓内科学)

感じています。

以上はほんの一部の紹介ですが、一年半に及ぶ臨床実習は「百聞は一見に如かず」の連続でした。

COVID-19の影響を受けてオンライン実習に切り替わることもありましたが、この激動の時代に実習ができたことも貴重な経験と捉えています。好奇心旺盛に学び続け、良い医師になりたいです。



凝固薬リバーロキサバンの薬物動態に影響を与える患者因子について報告したのも、三つ目は悪性リンパ腫に用いられるCHOP療法を構成する抗がん剤三種の高齢者における薬物動態の特徴を明らかにし、簡便な薬物曝露量推定法を構築したものです。個々の研究におきましては、消化器外科学講座、循環器腎臓内科学

研究室紹介

大学院四年 反町 悠也
(循環器腎臓内科学)

循環器腎臓内科学講座の大学院には現在十四人が在籍しております。そのうち大学院三、四年目の九名が主に研究に従事しています。

基礎実験、研究についてはレニン過剰発現マウス(RenTg)を用いて実験をすすめる予定です。RenTgは、肝臓でレニンが過剰に産生され、高血圧を引き起こすよう遺伝子改変されたマウスであり、レニ

ン・アンジオテンシン・アルドステロン系(RAS)の亢進により心肥大や線維化など様々な臓器障害を引き起こします。RASの亢進による心血管系リモデリングには凝固系の活性化が関与していることが示されており、RenTgにおいては、過去の実験によりトリロビン受容体であるProtease activated receptor (PAR)-1の発現亢進を認めており、心臓領域において

講座及び腫瘍内科学講座の先生方のご指導と病棟看護師さんの患者採血へのご協力のおかげで、成果を論文化できました。皆様には心より感謝しております。今後も薬剤業務と研究活動を両立しながら、薬物療法の適正化に貢献していきたいと思っています。

大学院生だより

大学院四年 反町 悠也
(循環器腎臓内科学)

はPAR-1シグナル阻害によりRenTgの心臓リモデリングや炎症性細胞沈着の抑制を認め炎症性サイトカインの遺伝子発現が抑制されることが示されています。

PAR-1シグナル抑制はRAS亢進による心臓リモデリングを抑制し、心不全の新しい治療標的となりうる可能性が示唆されました。

腎臓領域についてもPAR-1活性において炎症性サイトカインが活性化されマクロファージや線維芽細胞が蓄積され、腎機能障害が悪化する報告があります。現在私は過去の先輩方の研究をもとにしてPAR-1のシグナル伝達抑制による腎保護作用について検討する予定です。

東京2020オリンピック

聖火ランナーを務めて

健康未来イノベーションセンター副センター長／教授 村下 公一

令和三年六月十日(木)、青森市の青い海公園にて「東京2020オリンピック聖火リレー」が開催されました。当日は晴天に恵まれ、青森県ビックアップ聖火ランナーとして出場し、担当区間を走らせていただきました。

「岩木健康増進プロジェクト」に携わっている自分たちがオリンピックという国際的なイベントで聖火をつなぐことにより、本学の推進する「岩木健康増進プロジェクト」(「寿命革命」)を、地元のみならず世界のより多くの人に知っていただき、また地域全体で健康づくりについて考え、短命県返上に向けた取組や機運をさらに盛り上げていくきっかけになればと思います、東京2020オリンピック委員会本部からの推薦を受け、聖火ランナーをお引き受けすることにしました。

大学院生だより

大学院四年 反町 悠也
(循環器腎臓内科学)

当日は、新型コロナウイルス感染症の拡大の状況により、当初予定していた公道での実施ではなく、より青い海公園の特設会場

にも外病院での臨床業務や当直、教室業務、また専門医試験を受験したりと比較的忙しい日々を過ごしております。残り大学院生活もあつという間に一年半程度となりましたが、自分の可能性を広げられるような悔いのないよう過ごしたいと思っています。

での開催となりました。点火セレモニーでは、青山副知事のご祝辞に続いて、秋田県からつながれた聖火がともされ、第一走者の元ソフトラール選手の斎藤春香氏を皮切りに、それぞれの走者が思いを胸に区間を走り抜けました。

私の次の走者は高校生でしたが、遠くギリシャを出発して多くの方々がつかない聖火を受け取り、その火を次世代の若者へつないでいくということ、実際のトーチ以上に重さを感じ、感慨深いものがありました。

大学院生だより

大学院四年 反町 悠也
(循環器腎臓内科学)

健康未来イノベーションセンターでは「岩木健康増進プロジェクト」を推進し、超多項目ビッグデータを基盤にAIを活用した疾

患発症予測モデルの開発等と、多くの企業と連携して商品・サービス開発等の社会実装に取り組んでいます。将来的には、成果を集約した新健診モデル「QOL健診」の展開により、世界の健康づくり・SDGsへの貢献を目指しています。

最後となりましたが、今後とも引き続き先生方のご指導・ご支援を賜りますようお願い申し上げます。



区間を走る

令和3年全日本柔道選手権東北予選会において
2位入賞、国立大学医学部初快挙！

全日本選手権に進出へ

医学科四年 藤本 智朗

この度、全日本選手権という最高峰の舞台に立たせていただくことになりました。

私は、医学部においても部活動においても、環境に恵まれていると言えます。

間たちの後ろ姿が、立ち止まりそうになる私を何度も奮い立たせてくれました。

私を支えて下さったみなさんへの感謝の思いを胸に、まずは一勝を目指して全力で頑張ります。

柔道をはじめたのは五歳、医師を志したのは中学二年生ごろですが、高校生になり、インターハイや国体に出場するようになってからは常に「柔道も勉強も頑張る」毎日でした。そして四年前、「柔道も勉強も頑張れる大学」として弘前大学を志願し、入学することができました。一年次は少しばかり余裕もあり、キャンパスライフを楽しむ時間も取れましたが、二年次は想像をはるかに超える忙しさでした。何をどう削っても一日二十四時間では足りない日々が続き、時間的にも体力的にも限界で「どちらかひとつに絞るべき時が来てしまったのか」とくじけそうになりましたが、柔道部のモットーである「自分で考える稽古」に立ち返り、自分で練習スケジュールを調整し、短時間でも「課題を意識した練習」を積み重ねることで乗

り越えることができました。



リハビリテーション科の藤田彩香と申します。私は、弘前大学を卒業後、麻酔科に入局、廣田和美先生ご指導の下、麻酔科医として手術・ICU・ペインクリニックの経験を積ませて頂きました。当時の私は、ICU退出後の重症患者さんや癌や慢性疼痛の患者さんに何か他の治療のアプローチはないか等、問題



若手教員・医師だより

中年医師だより

リハビリテーション科 助手 藤田 彩香

解決することに興味があったように思いますが、何をしたいかわからず、もどかしい気持ちでした。その後、麻酔科専門医を取る少し前あたりに関節リウマチを発症、長いステロイド生活を始まりました。体調をコントロールできない自分に価値がないように感じていた頃、主人の留学が決まり、二年間のオーストラリア生活が始まりました。そこで出会った友達が「弁護士は向いていなかったの」と新たに臨床心理士を目指して大学に通っている姿を見て、人生は一つの道だけではないのだなと目が覚めたような思いでした。梓の中にとられず、やってみ

たいことに挑戦し、出来る範囲で人の役に立とう！帰国して、リハビリテーション医になることを決め、弘前脳卒中・リハビリテーションセンターで研修が始まりました。研修の傍ら、輸液の違いで脳梗塞の回復が異なることを発見し、発表しなくてはという使命感と誤嚥性肺炎予防の早期離床プロトコルを作成することについてい夢中に。上司より「リハビリテーションは障害を扱うもので、君はリハビリテーション科医ではない。」とお叱りを受けましたが、何とか専門医を取得することができました。

立ったところですが、青森県の絶滅危惧種「リハビリテーション科医」にご興味を持って頂けるように頑張ります。（疲れたら、時々休みます。）

よく感じます。実際ののびと育てている子供達をみると青森で子育てして良かったなと実感します。自身は小学五・六年の時、中学受験の勉強に追われる日々だったのでそんな思いをさせたくないという思いもありました。もちろん、都会での中学受験をはじめとする様々な競争する機会は子供の成長に大事だと思います。もし、青森を出てチャレンジしたいという時が来れば喜んで送り出したいです。

この記事を読んでくれてる学生さんへ一言。地域卒の人もそうでない人も、母校で医師として育つというのをどうか戦略的に考えてみて下さい。また、十年後や二十年后に実感する青森での生活の豊かさがきっとありますよ。

公益社団法人 青森医学振興会

【沿革】平成11年3月1日 弘前大学医学部医学科後援会鵬校医学振興会発足（任意団体）
平成13年4月2日 社団法人青森医学振興会設立認可
平成24年4月1日 公益社団法人青森医学振興会へ移行認定

当会では、青森県の医学・医療の発展を促進するため、次の事業活動を行っております。

- 医学教育活動の活性化を図るための事業への支援
- 医学・医療の高度化に資する医学研究事業への支援
- 地域医療の振興に寄与する事業への支援
- 海外との学術交流等の活性化を図るための事業への支援

随時、会員の募集とご寄附を受付しております。

本会の公益目的事業に対する寄附金（会費を含む）は、確定申告をしていただくことにより税制上の優遇措置の対象となります。

会費は下記いずれかの口座へご納入ください。

なお、ご入会をご希望される方は、**専用の払込用紙**をお送りしますので、お手数ですが当会までご連絡をお願いいたします。

口座名	公益社団法人 青森医学振興会		
口 座	青森銀行 弘前支店	普通	1087485
	みちのく銀行 大学病院前支店	普通	0198579
	ゆうちょ銀行	口座記号番号	02200-4-57580
	※青森銀行及びみちのく銀行の本支店並びにゆうちょ銀行（注1）から振込む場合には、別途手数料は発生しません。		
会 費	会員種別	年会費	注 1…ゆうちょ銀行では、令和4年1月17日以降に、窓口及びATMにおいて現金で払い込みをする場合には、払込人様が加算料金110円をご負担いただくことになりますので、ご注意ください。（口座からのお支払いをお勧めします。）
	医学部教員	1万円	
	医学部卒業生等	2万円	
	賛同する個人 賛同する団体	2万円 10万円	

ご寄附については、上記の口座へ振込手数料を差し引いた額をお振込みいただいで差支えありません。

お問い合わせ 公益社団法人青森医学振興会事務局
TEL・FAX 0172-40-2872 E-mail : info@aomori-mpm.jp

若手教員・医師だより

若手教員・医師だより

産科婦人科学講座 助教 飯野 香理



産科婦人科学講座の飯野香理と申します。夫は大学病院で内科医として勤務していますので、常日頃夫婦ともども皆様にはお世話になっていきます。今回、医学

部ウォーカーに自己紹介をさせていただきましたことになりました。せっかくだいたい機会ですので、埼玉県出身である私が青森で暮らして感じていることをお伝えしようと思います。

私たち夫婦は共に埼玉県出身でしたが、卒業後青森に残って医師として働くことを選択しました。その時はいままで青森で暮らすかということは明確に決めておらず、青森に残った理

由も「とりあえず母校で医師としてスタートしよう」といった程度でした。結婚後、夫の母親がサポートのため青森で同居するようになり、三人の子供に恵まれて現在は家族六人で暮らしています。正直に申し上げますと、医師として働くなかで関東に戻ることを検討したこともありましたが、家族で出した結論は青森に残ることでした。その理由の一つは青森での生活が関東よりも多くの面で「豊か」であると思ったからです。衣食住のゆとりは心のゆとりとなり、子供にも余裕をもって接することができます。関東に比べて青森の方は穏やかで少し、子供に向ける眼差しも温かいと

よく感じます。実際ののびと育てている子供達をみると青森で子育てして良かったなと実感します。自身は小学五・六年の時、中学受験の勉強に追われる日々だったのでそんな思いをさせたくないという思いもありました。もちろん、都会での中学受験をはじめとする様々な競争する機会は子供の成長に大事だと思います。もし、青森を出てチャレンジしたいという時が来れば喜んで送り出したいです。

糖鎖工学講座

糖鎖工学講座 准教授 柿崎 育子

当講座は、その礎である青森医学専門学校の医化学（一九四四年）大内太郎教授、一九四七年（佐々木文二教授）の流れを汲み、一九五四年に新制弘前大学医学部の生化学講座（檜山登教授）となり、一九七二年に生化学第一講座と改称（一九八一）二〇〇二年遠藤正彦教授、二〇〇二（二〇〇六年）高垣啓一教授、二〇〇六（二〇〇七年）遠藤正彦教授（併任）、大学の重点化に伴い、現在の大学院医学研究科附属高度先進医学研究センター糖鎖工学講座（二〇〇七）二〇一二年 遠藤正彦教授（併任）、二〇〇七年（現在伊東健教授（兼任））となりました。二〇〇九（二〇一

五年は、サンスター株式会社様からの寄附講座（糖鎖医学講座、糖鎖医化学講座）と連携し、研究、教育活動を行って参りました。現在は、センター内の二講座で連携して活動しております。偉大な教授達を中心

のOBの先生方は現在、臨床講座や病院、他機関で活躍です。現在も温かくご指導ご支援くださり、臨床講座に在籍する大学院生を研究のために派遣くださることもあり、感謝申し上げます。

当講座は、動物の細胞外マトリックスの成分である



研究室紹介



地域に根差した三次救急から被ばく医療そして感染症まで

救急災害医学講座は二〇〇四年十月に北里大学から浅利靖教授が赴任して開設されました。本年十月で満十三歳になりますが、その前身の救急部は一九七八年に開設されており、通算では四十七歳となります。同窓会もない小さな教室ですが、実は歴史はそれなりです。もうすぐ半世紀を迎えます。

高度救命救急センターは地下一階が被ばく医療のための施設、一階が救急外来、二階が救命病棟になっています。地下の施設は放

救急・災害医学講座

救急・災害医学講座 教授 花田 裕之

射線被ばく・汚染患者診療のみならず、線量測定のための施設もあります。二〇一一年の福島第一原発事故をきっかけに被ばく医療体制は注目され見直されるようになりましたが、施設と設備は大いに活躍することとなりました。現在は機器更新も少しずつ進み、生物学的線量評価が日常的に行える環境が整いつつあります。現在血液検査だけで線量評価ができるかを被ばく医療総合研究所とタイアップしながら取り組み始めたところ。新型コロナウイルス感染症診療のため、地下の一部は感染患者の緊急手術設備として用意

されています。被ばく医療と感染症医療はゾーニングやPPE装着など共通点も多く、被ばく医療の知識を生かしてセンター全体でCOVID19診療にも取り組んでいます。

青森県全体をバックアップする三次救急の担い手として、その役割を果たせるように診療体制を整えてきました。重症多発外傷診療、熱傷診療、中毒や熱中症などの環境障害、敗血症といった疾患から、地域医療のための二次救急までを診療しております。救急医療が再来以外の救急患者の初療を担当しますが、緊急手術やIVR、心臓カテーテ

複合糖質、特に糖鎖を対象としたマニアックな研究を行っていることから、医学研究科の基礎講座として何ができるか、地域の大学の一員として何をすべきか、ということに常に考えて参りました。当講座の先輩方は、県内の研究者とともに一九九七年に本県の糖質科学の振興、教育の向上、産業の発展への寄与を目的とした青森糖質研究会を設立しました。現在も青森糖質研究会および、これを土台に二〇〇七年に設立された日本応用糖質科学会東北支部の運営に中心的な役割を担い、産学官民が集う勉強会を開いております。一方、青森糖質研究会が母体となった産学官の交流は、

プロテオグリカンの応用研究事業（文部科学省のご支援による都市エリア産学官連携促進事業、地域イノベーション戦略支援事業）へと発展し、二〇〇四年より二〇一七年まで四期にわたって継続され、地域との連携や産業に様々な形で関わらせていただきました。事業終了後も産、学、官のそれぞれの立場で内容を成熟させております。

当講座では、主として生化学的な実験手法により、糖鎖の構造と機能との関係を明らかにすることを目標としており、現在の主な研究内容は以下の通りです。

1. 糖鎖組換え技術の開発と複合糖質の機能解析への応用
2. 病態モデル、組織再建モデル等における糖鎖解析
3. 診断法、治療法につなげることを目指した糖鎖をターゲットとした基礎的な研究

今後とも地域への貢献を目指すとともに、ほぼ全ての生命現象に関与する糖鎖の役割を構造に基づいて解明する研究に地道に取り組んでいきたいと思っております。糖鎖に興味のある学生さん、一度研究室を覗いてみてください。基礎および臨床の先生方には、折々にご指導、ご助言をいただくことができましたら有難く存じます。よろしくお願い申し上げます。



ルなど各診療科の協力があって初めて三次救急が成り立ちます。すべての診療科が夜間休日でもバックアップしてもらええる当院であるからこそ三次救急が成り立っているところです。二次輪番は整形外科、消化器外科と各内科からの救急科応援スタッフを中心に診療にあたっております。センター全体の診療レベルアップにより、COVID19診療においてECMO治療も行えたことは、地域の要望に応えられたと思っております。高度救命救急センターがCOVID19診療に特化した時期は、特にICUを日常的

に使っている診療科の協力が不可欠でした。現在救急専門医も七人となりましたが、まだまだ交代制勤務を続けるためには、各診療科からの医師応援が必須の状況です。多少ではあります。が、地域の中核となる病院の救急を人間的に補助していくことにより、青森県全体の救急医療レベルを高めていきたいと考えております。JOINを用いた地域救急システムや、リング作業に伴う外傷予防など臨床的に取り組んでいることを中心に研究も展開しています。

部活動紹介

準硬式野球部

医学科四年 桑原克彰

私たち準硬式野球部は、現在部員四十名（プレーヤー三十一名、マネージャー九名）で活動しています。現在の活動は、南塘グラウンドや県内の諸球場での練習が中心となっています。例年であれば北海道・東北各地の大学と練習試合を多数実施していましたが、現在はそれが難しい状況ですので基本的な守備・打撃練習や部内での紅白戦等を通して日々技術力向上に努めています。昨年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、対面授業は中止となり、メディア授業へと移行されました。加えて、課外活動も休止となり、準硬式野球部の練習もできない状態が続き、これまでとは異なった大学生活に対応しなければなりません。これまでは東医体優勝を合言葉に毎年練習に励んでいましたが、今年は昨年に続いて二年連続で東医体が中止となっていました。そのような状況ではありますが、現在は純粹に野球を楽しむという事で青空の下全力で白球を追いかけてバットを振り汗を流しています。試合が出来ず苦しい面もありますが、昨年の野球が出来なかった日々を思うと、現



在野球ができていいる事に對して喜びと感謝を強く感じています。今後もこの気持ち忘れず活動していきたいと思ひます。また、例年であれば遠征の際には観光をしたり、皆で花見・BBQ等をしたりと様々なイベントがあり充実した活動をしていいます。現在是我慢の日々が続きますが、今後可能になればそういったことも通して部員間の交流を深めていければと思ひます。最後になりましたが、準硬式野球部の練習ができない期間にも関わらず私たちの活動をご支援いただきました先生方・関係者の皆様には本当に感謝していません。今後も、より良い部活動を目指してより一層励んでまいりますので、何卒よろしくお願い申し上げます。



陸上競技部

医学科四年 金野隆充

医学部陸上競技部は現在総勢五十六名、今年度から新顧問の掛田教授のもとで活動しています。練習は水曜日、土曜日の週二回で、弘前市運動公園陸上競技場を中心に、弘前公園、冬場は体育館、城西大橋等も利用して練習をしています。練習時間は一般的な部活動に比して少ないですが、仲間を誘って自主的に練習をする、勉強に集中する、バイトで稼ぐ、趣味に没頭する等も個人の自由です。他の部活動と兼部をしている部員もいます。陸上競技は勿論、大学生活で様々なことに挑戦出来る部活です。そのような雰囲気です。で、中学の時から陸上競技をやっていた医学生の大大会を超えて活躍できる部員と、運動は苦手な未経験者だけでなく、健康のために皆で楽しく走りたい部員が各自の目標をもって気兼ねなく一緒に練習出来ます。一方でリレーや駅伝といったチームで走る団体競技の楽しさもあります。陸上競技は「走る」「跳躍」「砲丸投げ」等の「投擲」等様々な種目が



国際医療研究会では週一回、毎週水曜日の十九時から活動しています。各活動日ごとに発表担当を決めて、自分で決めたテーマについて調べてパワーポイントを作成し、みんなの前で発表します。例年、テーマ決めは国際医療に関するものはもちろんですが、デイスカッションやプレゼンテーションの練習として国際医療とは関係の無いテーマを扱うこともあります。今年は新型コロナウイルス感染症を大きなテーマとして、日本だけでなく海外のコロナ対策や、ワクチン、PCR検査などを取り上げました。パワーポイントにまとめた



ものを元にポスターを作成して総合文化祭の時に展示して、来てくださった方々に見てもらい、質問を受けた時はお答えします。また、長期休みには長崎大学の熱帯医学研究会を訪問し、見学や交流をするスタディツアーを行います。自由参加で興味のあるメンバーが企画します。昨今はコロナの影響で中止になり

ましたが、無事収束したらまた再開する予定です。長崎大学にいる国境なき医師団で活躍する国際医療研究会の先輩に講義などとしていただきました。まじめな企画ばかりではなくて、長崎やその周辺地域の美味しいものを食べたり有名な観光スポットを訪れたりして、先輩後輩仲良く楽しいひと時を過ごします。プレゼンするって、なんだか堅苦しそうでつまらないと思う。しかし医師になるとカンファレンスや日常診療などで、複数人に対して自分の考えを相手にわかりやすいように伝えるなければいけない場面がたくさんあります。医師の力量はプレゼンテーション能力でわかるということも過言ではありません。人に説明するのが苦手な人や緊張して話をうまくまとめられない学生は少なくないと思います。将来医師として働く時に役立つように、学生のうちからプレゼンテーション力を養えることが国際医療研究会の魅力です。

国際医療研究会

医学科三年 出川葉月

あります。走るのが遅くても活躍できる場があるの、色々な種目にチャレンジしてみるのも一興です。今年度はコロナ禍で臨床実習生が一切部活動に参加できない厳しい制約があり、部の目標となる北医体、東医体、新歓行事や飲み会といったイベントも全て中止となりました。それでも部員一丸となって今できることを考え、青森県内の参加可能な大会に参加する、来年度以降を見据えて練習する等の工夫をしています。陸上競技は全てのス

ポーツから転向可能で、身につけた走力、筋力、体力は全てのスポーツ、日常生活や卒業後に医療従事者としても活かせる重要なものです。一見シンプルな競技ですが、その奥は非常に深く、常に自身と向き合い考え続けます。技術を学び、自分のフォームを改善して結果に繋がったときの喜びや、チームで勝ち取った記録や勝利の喜びは何ものにも代え難いものです。是非、医学部陸上競技部に入って私たちと一緒に味わってみませんか。

青森 あずまし 温泉紀行 30 鬼島 宏 (病理生命科学講座・教授)

温泉法（前回の続き）では、温泉とは、源泉の水温摂氏二十五度以上、若しくは定められた成分を一定以上含むことと定義されています。この定義から、定められた成分が含まれていない温泉は、すべて単純温泉（E80以上はアルカリ性単純温泉）に分類されています。この前置きでお分かりのことと思いますが、単純温泉とは単なるお湯ではなく、多種多様の単純温泉が存在します。例えば、日本一黒いモール温泉として有名な東北温泉（第二十湯：医学部ウォーカー第七十五号）も、分類ではアルカリ性単純温泉です。ということで、単純温泉を巡ればめぐるほどその泉質は奥深いものです。



らんぷ温泉

上北郡東北町のキャッチフレーズは「みどりの大地と小川原湖に彩られたいのち輝くいで湯の里」とのこと、町内十二の日帰り施設が全て天然温泉とのこと、素晴らしい一言です。

色アルカリ単純温泉で、あつ湯・ぬる湯があり、さらにぬるめの露天風呂があるので各温度の温泉を味わうことができます。



姉戸川温泉



強羅環翠楼（今では珍しいタイル張り浴室に澄みきった単純温泉）



強羅環翠楼（廊下には歴史を語る数多の記録が展示）

今回は、「単純温泉」に注目してみました。泉質分類で最も多くの温泉が含まれているのが単純温泉ですので、各温泉の泉質を堪能してみてください。

て程なくした山間にあります。県道沿いに看板があり、源泉名は池の端温泉のようです。鄙びた秘湯感のある温泉で、泉質はナトリウム・塩化物泉（弱食塩泉）です。無色透明で、若干塩味がありますが、癖がなく熱すぎない湯は最高です。

人事異動 (R3.6.1～R3.8.31)

●医学研究科所属

【昇任】

発令日	所 属	職 名	氏 名	前 所 属
R3.7.1	むつ下北地域医療学講座	准教授	高畑 武功	消化器血液内科学講座 講師
R3.7.1	胸部心臓血管外科学講座	講師	齊藤 良明	胸部心臓血管外科学講座 助教
R3.8.1	健康未来イノベーションセンター	教授	三上 達也	健康未来イノベーションセンター 准教授

【配置換】

発令日	所 属	職 名	氏 名	前 所 属
R3.6.1	産科婦人科学講座	助教	飯野 香理	周産母子センター 助教
R3.6.1	健康と美 医科学講座	准教授	神田 晃	食と健康 科学講座 准教授

【辞職】

発令日	所 属	職 名	氏 名	異 動 先 等
R3.6.30	脳神経外科学講座	教授	大熊 洋揮	独立行政法人 国立病院機構 弘前病院 病院長
R3.8.31	消化器外科学講座	助手	一戸 大地	沖縄県立八重山病院
R3.8.31	附属子どものこころの発達研究センター	特任助教	新川 広樹	弘前大学 教育学部学校教育講座（心理）助教

●附属病院所属

【昇任】

発令日	所 属	職 名	氏 名	前 所 属
R3.6.1	周産母子センター	講師	伊東 麻美	産科婦人科学講座 助教
R3.7.1	耳鼻咽喉科	講師	工藤 直美	耳鼻咽喉科 助教

診療教授等新規称号付与者 (R3.6～R3.8)

称 号	氏 名	所 属	期 間
診療講師	飯野 香理	産科婦人科	令和3年7月1日～令和6年6月30日
診療教授	齋藤 紀先	感染制御センター	令和3年8月1日～令和6年7月31日

『医学部ウォーカー第97号』掲載記事の訂正とお詫び

『医学部ウォーカー第97号』掲載記事において、誤りがございました。つきましては、下記のように訂正をさせていただくとともに、関係者の皆様にご迷惑をおかけしましたことを深くお詫び申し上げます。

『医学部ウォーカー第97号』 14ページ

「臨床教授・臨床准教授新規称号付与者名簿（令和3年4月1日付）」

（正）

称号名	氏 名	現 職 名	称号付与日	称号付与期間	推薦講座
臨床准教授	鈴木 伸作	市立函館病院 医療部長 乳腺外科科長	2021年4月1日	2021年4月1日～2024年3月31日	消化器外科学
臨床准教授	笠島 浩行	市立函館病院 消化器外科科長	2021年4月1日	2021年4月1日～2024年3月31日	消化器外科学
臨床准教授	高橋 誠司	黒石市国民健康保険黒石病院 外科部長	2021年4月1日	2021年4月1日～2024年3月31日	消化器外科学
臨床准教授	橋本 直樹	青森県立中央病院 乳腺外科科長	2021年4月1日	2021年4月1日～2024年3月31日	消化器外科学
臨床准教授	池永 照史郎一期	三沢市立三沢病院 外科医長兼手術室長	2021年4月1日	2021年4月1日～2024年3月31日	消化器外科学
臨床准教授	加藤 雅志	青森県立中央病院 がん診療センター外科副部長	2021年4月1日	2021年4月1日～2024年3月31日	消化器外科学
臨床准教授	大橋 大成	青森県立中央病院 がん診療センター外科副部長	2021年4月1日	2021年4月1日～2024年3月31日	消化器外科学
臨床准教授	堤 伸二	国立病院機構弘前病院 外科	2021年4月1日	2021年4月1日～2024年3月31日	消化器外科学
臨床准教授	山名 大輔	市立函館病院 消化器外科主任医長	2021年4月1日	2021年4月1日～2024年3月31日	消化器外科学
臨床准教授	小川 太郎	三沢市三沢病院 整形外科医長兼リハビリテーション科長	2021年4月1日	2021年4月1日～2024年3月31日	整形外科科学

編集後記

今年度広報委員会副委員長を拝命いたしました医療データ解析学講座の玉田と申します。無事医学部ウォーカー第九十八号を発刊することができました。ご寄稿くださいました先生方・学生の皆様に心より御礼申し上げます。ご協力大変ありがとうございました。

私事ではありますが、弘前に引越してきて半年以上が経ちました。今年の夏は例年以上に暑いようですが、弘前での初めての夏を過ごしている自分にとっては大変失礼ながら比較のしようがなく実感できずにあります。確かに昼は思ったより暑さを感じますが夜は気温が想像以上に下がり、また日も長いことから高緯度地域にきたことを実感しております。

さて東京オリンピックが開催され大いに盛り上がったところではありますが、本記執筆時点で、新型コロナウイルス感染症の東京での一日あたりの新規感染者数が五千人を超え、予断を許さない状態となっています。ワクチン接種も想定以上に進んではいるようですが、まだまだ絶対数は足りません。またこれまでと異なり中・若年層での感染の広がりも目立ちます。これからの油断することなくコロナ禍収束まで最大限注意して生活しようと思っっている次第です。

（玉田 記）

